

理事長所信

常滑青年会議所 2020年度

第59代理事長 光田 圭良

はじめに

1949年。終戦後間もなく明るい豊かな社会の実現を理想とし、責任感と情熱をもった青年有志により青年会議所運動は始まり、その運動は各地に伝播して行きました。

そして、1962年。その運動はこの常滑にも伝わり、明るい新しいまちづくりを推進していくことが我々青年の使命であると考え青年会議所活動を通じ、一致協力して我が愛する常滑の発展に最善を尽くしたいと46人の有志が集い、常滑青年会議所が設立されました。そのおもいは、脈々と受け継がれ、永きにわたり常滑に浸透し、常滑の発展に寄与してきました。その積み重ねられた歴史と伝統の重みを受け継ぎ、未来につないでいくとともに地域とのつながりを見つめ直し、既存のネットワークを更に強固にし、常滑の未来につながる関係を構築することで、地域社会における常滑青年会議所の存在感を高めて参ります。

J Cしか無い時代からJ Cもある時代になったといわれ、ややもすればJ Cの存在を知らないという人もいる現在、我々常滑青年会議所が常にまちの人々から必要とされる組織であり続けるためには、積極的に次代を見据え、先駆けとなる運動を発信していくことが必要不可欠です。

明るい豊かな社会の実現を理想に掲げるのであれば、我々一人ひとり、役目が異なっても常に明るい豊かな常滑を創造することに向いていなければなりません。10年先、20年先、の常滑のために今やらなければならないことを考え、まちの人々の意識の変革を促して参ります。では、今やらなければならないことはなんのでしょうか。終戦から高度成長期において日本経済を盛り上げようと必死に先人は活動されてきました。一つの目標を日本全国で共有し、世界経済第2位まで上り詰め、その目標は達成できたと感じた人が多くいたに違いありません。しかし、意図もしないバブルの崩壊で、失われた30年と称される事となり、その目標自体を問わなければならない時代となっています。経済が豊かになることは重要なことです。しかし、それだけでは人の心は豊かにはなれません。事実国連の関連団体が毎年発表する世界幸福度ランキングでは日本は上位にはいません。人の心が豊かになる。そのためには多くの原体験が必要ではないのでしょうか。青年会議所は原体験を創造できる組織です。自身の心を動かし、相手の心を豊かにする。本年度はそれを求めて邁進して参ります。

郷土を想う心の醸成

常滑は、懐かしさと新しさが同居したユニークなまちです。古くから常滑焼の産地として知られ、やきもの散歩道や国内最大級の招き猫の産地を象徴するところなめ招き猫通りがあります。また、歴史的に見ても、徳川家光の母「お江」が最初に嫁いだ先の大野城や郷土の偉人を多く輩出した鈴浜義塾などがあります。そして、中部国際空港や愛知県国際展示場を中心とした発展がめまぐるしいりんくうエリアがあります。

そんな地域資源に恵まれたまちの未来をまちの人々がどのように感じ、描き、多くの人々に発信していくか。そして、常滑に住まう人々の意識を我々がいかに未来に繋げ、促し、変革していくか。その問いを探り、あらゆる世代に主張し続けていく事こそが我々の存在意義を発揮できる場であると考えます。持続可能なまちづくりをする上では、まちの人々が主体となり、自らのまちは自らでつくり、世界に発信をする意識が必要です。そうする事でまちの人々一人ひとりが郷土を想う心を醸成し、世代を越え、継続的に魅力あるまちをつくりあげる原動力となるに違いありません。そこで、本年度の集大成として、常滑の人々とともに心を動かし、心を豊かにする瞬間を社会に多く与える取り組みをし、発信する場を設けます。そうすることで常滑の人々が行うまちづくり運動を継続的に、且つ大きく前進させるきっかけを与えて参ります。

運動の明確化と無駄のない組織運営

心を動かす運動を推進するうえで、最も戦略的に考えなければならないのは、効果的な情報の発信です。そして、まちの人々の心を動かすためには、まちの人々から青年会議所運動を認めてもらわなければなりません。さらに、青年会議所運動を認めてもらうためには我々一人ひとりが青年会議所の本質を明確に捉える必要があります。また、組織として本質を共有し、共通認識としてもつことで、はじめて対外的にも青年会議所運動を発信できようになります。そして、発信をするためには技術も必要です。半世紀以上続く青年会議所で培われてきた技術を活かすことが最善だと考えます。

組織で活動するうえで重要なのは、事柄でいかに合意形成がなされているかだと考えます。一人で活動していくのであれば合意形成は必要ありませんが、我々は組織で運動を展開しなければなりません。一つの目的に対し、多くの意見を反映する事で質の高いものになり、目的の達成に近づくからです。しかし、やみくもに議論を交わしているだけでは時間ばかり要してしまいます。そこで徹底したルールが必要となり、それを厳格に管理していくことが組織運営で重要な事となります。青年会議所で採用されているルールをメンバーが理解し、無駄のない組織運営をして参ります。

全ての出会いに意味がある

人は人によって磨かれるものであるならば、出会いの数が多ければ多いほど磨かれるチャンスは増えます。そして、出会いの機会をお互いがチャンスと捉え、関係性を深めてい

くことで組織の質は向上し、無限の可能性を生み出します。こと青年会議所活動も同様であると考えます。メンバー一人ひとりが、一つの目的に対し、議論を交わすためにはまずは互いの事を知り合わなければなりません。同じ背景をもったメンバーが集まった組織ではないからです。メンバー間の年の差は最大で20年あり、生きてきた時代や育ってきた環境が異なります。そのような組織が地域の牽引役としてまちの人々の意識の変革を促すのであれば、世代間のギャップをなくさなければなりません。メンバー同士の交流を多く育み、共に同志として活動できる環境を整え、あらゆる面から意見し合えることができる組織を目指します。そして、常滑青年会議所だけでなく愛知県内、日本、世界には同じ志をもった仲間がいることを認識し、垣根を越え、関りをもち続けるよう努めて参ります。

危機感をもった会員の拡大

本年度、期首メンバー数は設立メンバー数の半分以下です。会員拡大は重要な継続事業であり全メンバーが一丸となり危機感をもって取り組まなければなりません。我々が掲げる理念を継承し、活動を続けていくには会員拡大は避けて通ることはできません。より多くの方に青年会議所運動を共感して頂くことが会員拡大に繋がる近道だと考えます。しかし、私も含め多くのメンバーが青年会議所運動に共感して入会したわけではありません。そこには入会を促してくれたメンバーがいて、そのメンバーの魅力や情熱に引き付けられ、心が動いたからこそ入会したのではないのでしょうか。心が動く瞬間は人それぞれ違うと思います。だからこそ、全メンバーで会員拡大を行い、入会候補者が心を動く瞬間を感じてもらえる可能性を広げなければなりません。また、入会候補者数を増やすべく、メンバーがもちあわせている人脈を活かし、入会対象者の母数を底上げする必要があります。入会対象者を増やすことは、青年会議所の認知度が向上することに繋がります。まずは青年会議所を知ってもらうことが前提です。そのうえで共感してくれる人々を増やしていくことで、入会者を増やし、心を動かし、動かせる人財を輩出するように邁進して参ります。

結びに

私は2015年に入会させて頂きました。3年前に常滑青年会議所で委員長を務めさせて頂いた頃から、青年会議所の魅力を感じ続けています。そして、私の人生においてこんなにも心が動いた瞬間はありませんでした。特に心が動いた瞬間がふたつあります。ひとつめはとうかい号での経験です。研修委員会の委員として乗船したのですが、時の研修委員会は研修のために活動するのではなく、チーム付としてチームのために時間を費やしてもらいたいとの強い意向がありました。また、本音で語り合えるチームを構築してほしいとのミッションが与えられていました。私の人生において、本音で語り合う経験は皆無に等しかったので、周りの研修委員の方がそういったチームを構築していく姿をみてかなり悔しい思いをしたのを覚えています。チームの姿をみて、船内で何度も悔し涙を流しました。時間制限もあり、結果、自身が理想としていたチームには程遠い感じで下船すること

になってしまったと今でも後悔しています。

ふたつめはとうかい号での経験を終えた直後の担当例会の実施です。次世代育成の委員会でしたので、小学生を対象に例会を実施しました。当時の理事長は感動を重きにおいでおりましたので、私の基本方針は達成感を感じてもらいたいというものになっておりました。とうかい号の悔しかった経験を活かし、子供たちになんとか達成感を伝えようがむしゃらに行動したことを覚えています。その事が周りにも伝播したのか、多くのメンバーや関係者に支えられ、子供たちに伝えられたと思います。保護者の方から今でもあの例会は感動しましたと言われることがあり、本当にやってよかったと感じています。

このふたつの経験は、私の心を豊かにした経験であります。青年会議所活動は求めれば、自身の原体験になり得ると青年会議所ではよく語られます。正にその原体験をしたと自分なりには思います。そういった経験をさせて頂いた常滑青年会議所に感謝するとともにその経験を多くの人にしてもらいたいと思います。さあ、一年間、皆で自身の心を動かし、相手の心を豊かにする瞬間を求めて参りましょう。